

AIと哲学

1

最近では機械学習、いわゆるAIの技術が進歩している。大量のデータを処理し、人間が気づかない物事の関係性に気づいたり、人間の代わりに判断ができると言われている。

たとえば、AIに犬と猫の画像を大量に見せると、自然に犬と猫の区別ができるようになる。AIは、犬の特徴と猫の特徴を自分で見つけ出し、それを判断の根拠としているのである。

これは、人間の子供とどう違うのだろうか。人間の子供も、自分で犬と猫の違いを見分けられるようになる。そして、たとえば初めてトカゲを見たときに、これはなに、と親に尋ねる。おそらくこのあたりに、AIと人間の違いがある。

犬と猫の画像をAIに見せるときには、あらかじめ画像にタグを付けておかねばならない。これは犬、これは猫、と人間が判断した後で、その画像をAIに見せるのである。

しかし人間の子供は、自分から、犬と猫が違う存在であることを見抜く。それらの見分けがついているからこそ、名前を尋ねることができるし、名前を付けることができる。

果たしてAIは、ものの名前を尋ねることができるだろうか。AI

は、ものに名前を付けることができるだろうか。

これは、そもそも我々はどうして種を見分けられるのか、という問題を理解する手掛かりになるだろう。それぞれの猫はよく見れば同一ではないが、我々はそれを、同一の種の異なった個体である、と明確に認識している。いったいその認識は、どこから来たものなのか。AIにも、我々と同じように種が認識できるのだろうか。それとも種の存在は、まぼろしに過ぎないのだろうか。

2

三段論法は次の三つの要素で成り立っている。

大前提：…人間は死ぬものである。

小前提：…ソクラテスは人間である。

結論：…ソクラテスは死ぬものである。

ここで、大前提と小前提から結論を導く推論を演繹、ディダクシオンと呼ぶ。そして、小前提と結論から大前提を導く推論を帰納、インダクシオンと呼ぶ。最後に、大前提と結論から小前提を導く推論を、アブダクシオンと呼ぶ。

アブダクシオンは種の認識を意味している。それは、個物から抽象への飛躍である。

ソクラテスが存在する、ということの意味は明確である。それは、彼が死んでいない、ということである。では、人間が存在する、とはどういう意味だろうか。それはどこに存在するのだろうか。

端的な意味では、人間は存在しない。それぞれの個人は存在するが、人間という種が、この宇宙のどこかに実体を持って存在するわけではない。しかし、我々は人間という言葉を使うし、その意味も明確に理解している。ここに謎がある、と、哲学者は考えた。

この問題はある意味で、哲学の起源である。計算機科学は哲学の一種なのかもしれない。

意識と身体

我々の脳は日夜大量の情報を受け取り、それを処理し続けているという。にもかかわらず、我々の心や行動が統一されているのは、それらの情報がわずかな選択肢に絞り込まれ、我々に提示されているからだという。我々はそれを意識と呼んでいる。

では、なぜ、そのように情報が絞り込まれねばならないのかといえば、我々の身体が一つしかないからである。一つの身体が同時に二つ以上の行動をとることはできないので、選択肢は一つに決定されねばならない。それが意識の統一をもたらしている。

つまり、意識とは、身体のことである。身体が一つだから、意識も一つなのである。

因果律と論理学

1

ときどき、因果関係を論理的な関係と誤解している人がいる。しかし、因果律を論理によって捉えることはできない。

アリストテレス以来の論理学の伝統は、普遍と個物に関するものである。いかにして個物を普遍的な名辞と結びつけるか、という問題が論理学の本質である。

一方で、因果律の本質は場合分けである。同一の状況の下で、ある条件が満たされた場合と、満たされなかった場合とを比較することから、因果関係の認識が得られる。

したがって、論理学を構成するために因果律は必要ないし、また、因果律を把握するために論理学は必要ない。これらは全く別のものである。論理学をいくら調べても、因果律を見つけることはできない。因果律は論理学の外にある。

2

論理学は言葉に関わることだが、因果律は現実に関わることである。たとえば、二酸化炭素が原因で温暖化が起きている、ということを経験的に証明することはできない。むしろ、詭弁的な論理を弄すること、それとは反対の結論を導くことすらできる。

しかし、いくら言葉の上で否定しようとも、温暖化が起きていることは事実だし、その原因が二酸化炭素であることも事実である。また、温暖化に起因する自然災害によって、多くの人命が失われている

ことも事実である。にもかかわらず、様々な詭弁によって、温暖化を軽視しようとする人間が後を絶たない。

事実とは正反対の主張を、論理的に筋を通った形で行うことは常に可能である。したがって、論理学の知識によって、事実を明らかにすることはできない。ゆえに、論理学というものには何の価値もない。それは、現在の世界においては、誤った考えを人に信じ込ませるために、役立てられているにすぎない。

3

このような人々に、現実に危機が起きていることを知らせるためには、何をすればよいのか。実際に危機が起きているのに、それに気づかず、自分の利益を追求するために血眼になっている人々の目を、どうすれば覚ますことができるのか。

そのためには、彼らの身体に火をつけてやるしかないのかもしれない。洪秀全が南京を落としたように、大塩平八郎が大坂を焼いたように、一度すべてを焼き尽くすしかないのかもしれない。

4

たいていの商人は平和主義者である。なぜかといえば、農民が武器を持って立ち上がれば、商人はひとたまりもないからである。ゆえに、彼らは保身のために、平和主義を広めざるをえない。農民も同じように平和主義者でいる間は、安全に彼らを搾取できるわけである。

それに抗って、農民が自らの権利を主張するためには、武器を取るしかない。なぜならば、利益に目がくらんだ商人には、他人の言葉に耳を傾ける余裕がないからである。

そして、武士の本来の役割は、両者の仲介である。彼らは武威をもつて商人を抑え、仁政によって民を安んずる。その仕組みが機能しなくなると、大塩のような乱が起きる。

大阪の商人たちは、彼の名前を肝に銘ずるべきであろう。平和主義は万能ではない。

科学者の責任

1

地球温暖化の原因は二酸化炭素である、ということを否定しようとする人間は、たとえばこんなことを言う。

いわく、地球の歴史上、気温の変動は絶えず起きていることである。恐竜が生きていた時代には、平均気温は今よりも十度高かったし、氷河期には五度低かった。そのように気温の変動は常に起きているので、現在起きている温暖化も、自然現象として説明できる、という議論である。

だが、恐竜が生きていたのは一億年前である。氷河期は十萬年前である。一方で、我々が経験している温暖化は、この百年で起きていることである。一億年に十度の変化と、百年間に一度の変化とでは、全く異なる現象である。これを同列に論じることはいできない。

現在起きている温暖化は、地球の歴史から見ても異常な速さで進んでいるのである。そこには必ず何らかの原因がなければならぬ。

2

このように全く異なる現象であるにもかかわらず、データの見方を知らない人々は、同じ一度という数字だけを引っ張ってきて、これらは同じ現象だと言おうとする。

科学者の目から見れば、温暖化の原因が二酸化炭素であることは、ほぼ確実である。しかし、百パーセントと断言できるわけではない。なぜならば、その仮説はまだ実証されていないからである。

科学の正確さは、その実証性によって保証されている。どれだけ優れた仮説であっても、それが実験によって確かめられなければ、正しいものだと認められない。だから、二酸化炭素が原因であるという仮説も、それが実証されるまでは、百パーセント正しいとは言えないのである。この場合、実証とは、実際に二酸化炭素を減らしてみても、温暖化が止まることを確認する、ということである。

逆に言えば、もはや実証だけという段階まで来ている。これまでの研究によって、他の仮説はほぼ否定されており、あとは実証実験をするだけでよい。そういう所まで来ているにもかかわらず、訳の分からない連中がギャーギャーわめいているせいで、成果を出すことが難しくなっている。困ったことである。

3

だが、原因の一端は科学者にもある。科学者の議論は、基本的に真実を追求するためのものであり、相手も自分と同じだけの誠意を持っている、ということを前提にしている。ゆえに彼らは、事実を無視し、都合のいいデータだけを見て好き勝手なことを言うような、誠意のかけらもない連中を相手にした経験がないのである。

しかしこれからは、そういう人々を相手にした議論の仕方も学ばべきだろう。彼らが社会的な責務を果たすために、それは是非とも必要なことである。科学者は、自分たちが発見した事実を、社会に伝える手段を持たなければならない。

環境保護

1

人間が地球環境を破壊している、とよく言われる。そして、自然環境を保護するべきだ、ということもよく言われる。しかし、そもそも人間には、自然を破壊する能力などない。我々はただ、我々自身の生活を破壊しているだけである。

たとえば最近では、海洋におけるプラスチック汚染が問題となっている。海洋中にマイクロプラスチックが拡散することにより、地球環境に取り返しのつかないダメージが与えられる、と考える人もいる。では、そもそもプラスチックとは何か。プラスチックとは、石油から作られた繊維である。では、石油とは何か。石油とは、植物の死骸が変化したものである。したがって、プラスチックとは植物の一種である。ゆえに、自然環境中に放出されたプラスチックは、いずれ自然そのものの作用によって分解され、再利用されるだろう。

それは、自然にとっては何ほどのことでもない。人間が自然に与えた傷は、あつという間にふさがれてしまう。その傷は回復されるわけではない。そうではなく、過去にあったものとは全く別のものが、新しく生み出されるのである。自然の創造力には際限がない。

一つの生物種が絶滅するということは、新しい生物が生み出される

ための準備が整った、ということである。種の絶滅は一つのニッチが解放されることを意味し、それは、そこに収まるべき新しい生物の進化を促すのである。ゆえに、絶滅そのものは何ら悲しむべきことではない。

しかし、たとえばイネが絶滅したとしたり、人間の生活には大きな影響が出るだろう。それは、人間以外の生物にとっては取るに足りない出来事かもしれないが、人間にとっては死活問題となるだろう。

たとえばプラスチックごみの拡散は、プラスチックを栄養源とする新しい生物の繁栄をもたらすかもしれない。その結果、地球の生態系は大きく変化することになり、その過程で人間は死滅してしまうかもしれない。しかし、人間が死のうが生きようが、自然そのものには何の影響もない。

人間には、自然を破壊することはできない。むしろ自然の方にこそ、人間を破壊する能力がある。地球温暖化によって破壊されつつあるのは、地球環境ではなく、人間の生活である。我々は、我々自身の行為によって、我々自身の生活を破壊しているだけである。

したがって、環境保護ということは、人間のエゴイズムでなければならない。それは、自然を守るのではなく、人間の生活を守るためのものでなければならない。プラスチックがいずれは分解されるのだとしても、それが、人間が生活している間に起きるかどうかは分からない。我々は、我々が生活する環境を、我々自身で整えなければならない。それが環境保護である。

ここに示したような自然のはたらきを、西洋人は神と呼んでいるのかもしれない。だが、名前は何でもよい。名前が何であろうとも、現実には起きていることに変わりはない。

2

最近、コンビニや八百屋などで買い物をするときに、レジ袋は有料だと言われることが多くなった。海洋プラスチックが問題とされるようになってから、ビニール袋の使用を自粛する動きが出てきたようである。

しかし、いち利用者としては腑に落ちない。今まで無料だったものが、なぜとつぜん有料になるのか。ビニール袋の原価が上がったわけでもないのに、どうして値段を変えるのか。というより、疑問なのはむしろ、金さえ払えばビニール袋を使ってもよい、ということのほうである。プラスチックが海洋汚染の原因なのだとすれば、ビニール袋の使用を全面的に中止すればよいのであって、料金さえ出せばビニール袋を使える、という仕組みはどうもおかしい。レジ袋代三円を払うとき、いったい私は何に対してお金を払っているのか。

おそらく私は、良心を買っているのだろう。たとえそれが良くないことであっても、お金さえ払えば許されるわけである。海洋汚染は良くないことだが、三円払えばそれも許される。それが資本主義ということなのだろう。市場経済では、人間の心も体も余すところなく売買の対象とされる。私はそれが良いこととは思わない。

もちろん、レジ袋の売り上げが環境保護のために使われているのだとすれば、言い訳くらいにはなるかもしれない。実際にはただ企業の利益になっているだけだと思うが、もしもそれが環境保護の目的で使われているのだとすれば、もう一つ別の問題が出てくる。環境の保護は公共の利益に関する問題である。それを私企業が自らの責任で行うのであれば、私企業が公共性を担っていることになる。誰がそれを許したのか。私企業が公共性を担うことができるということを、誰が保証したのか。この点に関して十分な議論が行われていないということ

は、非常に問題のあることである。私企業はいつから公的なものになったのか。そもそも私企業自身は、自分が公的なものであることを認めているのか。

公私の区別は責任の在り方の問題である。公共性を持った活動とは、この社会で生じるすべての出来事に責任を持つということである。少なくとも、潜在的に責任を負うということである。いまは問題がなくともいざれ問題が起きるかもしれない。そのときには自分で責任をとるということである。環境保護に対して責任を負うということとは、環境の悪化に対して自分で責任をとるということである。環境保護のために努力はしたが結果は出なかった、という答えは認められない。必ず結果を出さねばならない。それが公共性ということである。地球環境が悪化した場合には自分の首が飛んでもよい、という覚悟のある経営者が一人でもいるだろうか。しかしそれは、公共性を担う者としての、必要最低限の覚悟である。ここで、首というのは役職のことではなく、首のことである。

食文化

沢庵を作るときには、大根はよく干したほうがよい。スーパーで売っている沢庵の多くは、大根を十分に干さずに調味液に漬け込んでいる。だが、干してから漬け込んだ方が、大根の旨みが凝縮されるし食感もよくなる。

塩鮭も本当は、鮭の身に塩を擦りこんで、しばらく寝かせておいたほうがよい。そうやって作った新巻鮭は、やはり旨みが強くなる。昔は冷凍保存の技術がなかったので、獲った鮭は塩漬けにして保存する

しかなかった。だが、そうして熟成させた方が、かえって美味しくなるのである。

こんな風に考えてみると、案外むかしのの方が、美味しいものを食べていたのかもしれない。いまスーパーで買物をする、どうしても値段にばかり目が行く。売る方も、あまり手間をかけずに商品にしてしまつて、大量に売りさばいた方が利益が出る。それも一概に悪いとは言えないが、食文化の観点から見れば、やはりよいことではない。

人間の文化は食事の中にある。コンピューターや電気自動車がどれだけあつても、うまい食事がなければ文明とは言えない。それも、レストランで高い料理を楽しむのではなく、日々の食事が美味しくなければいけない。

そう考えると、我々が本当に高度な文明を持っているのかどうか、疑わしくなってくる。